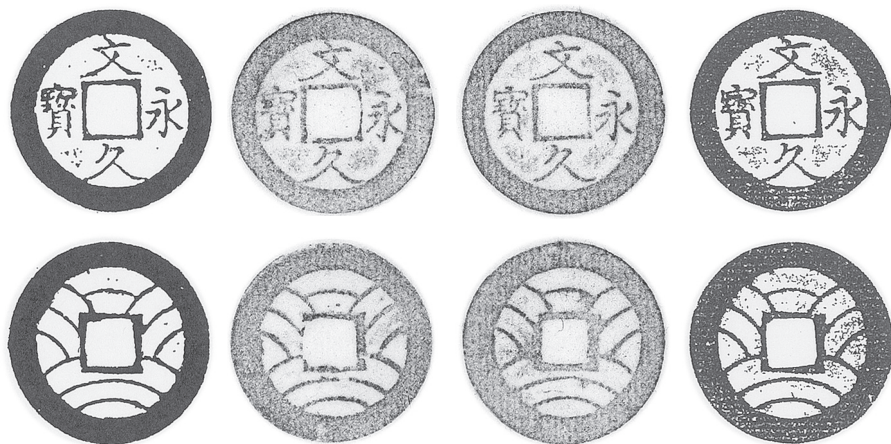


文久永寶直永手 細字短貝寶本体の発見

文久永宝周遊会



拓図4

拓図3

拓図2

拓図1

1.10×26.95
20.00×19.50

1.25×27.20
20.50×19.40

1.30×26.70
19.85×19.80

四年前に文久永寶の収集と分類研究を目的として文久永宝周遊会は発足致しました。大分の坂井でございます。小生は、深字手短久の解明に一生懸命であります。先日、宮崎の河谷俊一氏より直永手細字退貝寶を発見したと電話がありました。早速、現品を送ってもらった所「文久永宝分類譜」の直永手細字跋寶(拓図1)ではなく、直永手細字判輪(拓図2)の判輪になっていない銭です。

この時点では、拓図2の細字短貝

寶からの出発と思っておりましたので判輪の名称は使用しないようにしました。今後、拓図1と同じ状態の銭が発見出来れば、判輪の名を採用しようと考えていましたが、今回、宮崎の河谷氏より発見された直永手細字短貝寶本体(拓図3)は、拓図2の前の銭となります。そこで、拓図3を「直永手細字短貝寶本体」、拓図2を「直永手細字短貝寶判輪」と致します。なお、拓図下の数字は厚み×錢径、面至輪径×背至輪径で単位はミリメートルです。

ところで「文久永宝分類譜」拓図1の原品は、神奈川の安達勇氏の藏品となっております。これで、周遊会では2種類揃った事になります。

なお「文久永宝分類抄」442図に「真文織字跋寶」(拓図4)が載っていますが、当銭は、拓図1とは違い寶字の後足が前進していません。拓図1に比べて永字フ画と末尾が違い、寶字尔の前点も違います。また、冠は少し丸くなっていますので、「直永手細字退貝寶(冠寶)」と分類していただきます。直永手細字判輪銭を藏品の方、細字短貝寶本体が発見できるかもしれません。今一度確認してください。宜しくお願い致します。